

題目： 協調性の二側面 —積極的協同と評価感性—

氏名： 渡口真美

担当教員： 山岸俊男

欧米文化と東アジア文化の間で見られる行動や認知の文化差はなぜ存在するのかという問いは、これまで多くの研究者が取り組んできた課題であり、その解釈も様々である。例えば、欧米では「人間は他者とは切り離され独立した存在」と考える相互独立的自己観が優勢であり、東アジアでは「人間は根源的に他者と結びついている」と考える相互協調的自己観が優勢であるとする文化的自己観の違いによって文化差の説明を試みる研究や、欧米文化を個人主義、東アジア文化を集団主義と位置づける研究などが挙げられる。しかし、文化的自己観理論は実証研究を通じた検証はなされていないという指摘もあり、また、過去に行われた、質問紙を用いた自己報告式の個人主義・集団主義の研究では、アメリカと日本で集団主義の程度に大きな差はないという結果も得られている。

本研究では、自己報告式の尺度を用いた調査で予測された結果が出ないという問題に対して、従来用いられてきたような相互協調的自己観尺度には、協調性の異なる二つの側面が混同されているという仮説を立てる。二つの側面とは積極的に他者と協力しようとする側面と、つい周りを気にして他者に合わせてしまう側面であり、本研究では前者を積極的協同、後者を評価感性と呼ぶ。この協調性の二側面を弁別することの妥当性を示すことが、本研究の目的である。

この目的をかなえるため、高田の文化的自己観尺度やシンゲリスの文化的自己観尺度、山口集団主義尺度、気くばり尺度などの項目を因子分析し、積極的協同尺度と評価感性尺度を作成し、この二つの尺度と他の心理尺度との相関パターンに違いがあるかを検討した。その結果、社会的用心尺度やパラノイア尺度、主観的幸福感、その他複数の心理尺度との間で両者は異なる相関パターンを示し、協調性の二側面である積極的協同と評価感性を弁別することには妥当性があることが示された。

また、評価感性を測定する尺度の妥当性を、生理指標を用いる実験で検討した。実験では人前で自己顕示的な内容を読み上げる「ストレス課題」を行ってもらい、課題前後のストレス指標としての $\alpha$ -アミラーゼの変化量と、評価感性尺度との相関分析を行った。課題によるストレスの感じ方は個人差が大きかったが、課題によりストレスを強く感じた人ほど評価感性尺度得点も高いという結果が得られ、尺度の妥当性が示された。